

2021/5/11

(うとQ世話し 今こそ「グローバル」―「遠き、を近きに」の感覚育成から)

暫く前のニュースで、某途上国海軍の潜水艦が遭難し、全乗組員の生存が絶望との話を耳にしました。

遠い国の話です。

潜水艦というのは、途上国にとっては大変防衛パフォーマンスの高いものだそうです。

相手に見つからずに移動でき、たった一隻で、大国の中心部へ艦搭載ミサイルなどを使って相当なるダメージを与える事が出来るからの様です。

ところが、小国では自前の潜水艦を開発できない事は当然として、財源が足りない為に老朽化した潜水艦を碌なメンテナンスもせずに多頻度出航させているものですから、当然事故発生確率も上がる訳ですが、任務優先の為にその危険を冒しても出航せざるを得ない様でした。

そうして今回の事故。

「水圧制御不能。艦、浮上できず」

そのニュースに一枚の添付写真。

艦橋下の操舵室の計器板前で、全員がマスク無しで集まっている写真です。

この写真は、国民アピール用活動報告ストック写真の引用なのか、それとも最期にマスクを外して、覚悟を決めた事実写真なのかは分かりませんが、皆冷静な顔をして「微笑んでいる」様にも見えました。

しかし、もし後者だとすれば、それこそ彼らが味わっている生還の望みを絶たれた絶望故の恐怖と覚悟という「水圧」をありありと感じて、胸苦しくなりました。

一方、処変わって我が国。

少なくとも自宅近隣の状況は

生活音さえしない「潜水艦生活」の如く。

物音、気配、存在すらも「捕捉・探知」されぬ様に息を潜める「潜水艦生活」

最近の潜水艦は「敵に捕捉される危険を回避するため、如何に長期間に渡って水面浮上せず航行できるかに最重点が置かれ、酸素始め生活維持と作戦行動が隠密理に出来る」様に設計されて居るそうなのですが、将に我が住宅街は、是に等しく「如何に顔(実態)を出さずに内部生活を「敵」(将に敵なのです。周りが)から隠しおおせるか」の「隠密比べ」の如き様相。

自分が子供の頃はお隣さんのまな板をトントン叩く音や、お風呂での鼻歌が聞えるのが当たり前で、それが世間の日常でした。

しかし同じそれがいつの間にか「近隣住民への気遣いの無さ」や「不快感」になってしまっている様で、戸惑いを覚えてしまいます。

そんな自分が思うに「同じ潜水艦生活」をしているのであれば、遠い他国の出来事とはいえ、想像力を働かせて記事の中に同一項を感じ取り、今コロナ渦だからこそ「同じ身の上」の話

として捉えられる感受性や遠くの話も身近な事として捉えられる「スケール感（度量）」を養う事で、国際情勢にも目を向け、結果的に自らの生活をも顧みる。

それこそグローバルな視野で物事を見る癖を「鎖国 450 年、ガラパゴス島」の我々も、そろそろ身につけて良い様な気も致しております。

（追記）

どうせテレワークというなら

まずは「遠き、を近きに」感じる「その立場を想像してみる」感覚の育成が基礎ではないでしょうか。